ℓ－T_4投与により血清T_4高値、TSH高値、無症状のクレチン症の1例

臼井朋包　西　美和

（広島大小児科）

症例：昭和58年6月15日生　女児

主訴：スクリーニングテストでＴＳＨ高値

家族歴：母方伯母甲状腺機能亢進症で加療中。母のマイクロゾームテスト×6400以外，父母の甲状腺機能正常。同胞なし。

妊娠分娩歴：在胎40週，妊娠分娩正常。出生体重3030 g。

現病歴：日齢8日目のスクリーニングテストでＴＳＨ 160μU／mℓ以上と高値。13日目に当科受診。哺乳力，体重増加不良，便秘，黄疸，活動力低下をみとめ，血清ＴＳＨ 320μU／mℓ以上，T_4 1.6μg/dℓ，^{99m}Tc シンチで甲状腺正常位置，大腿骨遠位端骨核出現。クレチン症としℓ－T_4 20→50μg／日（3.5～8.0μg／kg／日）経口投与する。血清T_4 10～19μg／dℓ，free T_4 1.3～4.3 ng／dℓ，T_3 150～210 ng/dℓと正常～高値を示すにもかかわらずＴＳＨ 30～95μU／mℓと高値が1歳7カ月現在まで続いている。この間身長，体重増加，精神運動発達は正常で甲状腺機能亢進症状をみとめない。

1歳5カ月時のT_4 15.4μg/dℓ，free T_4 1.9ng/dℓ，T_3 185ng/dℓで，ＴＲＨ負荷でＴＳＨ 24.1μU/mℓ→77.1μU/mℓ（30分），38.6μU/mℓ（120分），プロラクチン 53.1ng/mℓ→62.2 ng/mℓ（30分），29.1ng/mℓ（120分）と過剰遅延反応を示した。チロナミン15→70μg／日投与によりT_3 563ng/dℓ free T_3 21.7pg/mℓ，T_4 5.9μg/dℓ，freeT_4 0.81ng/dℓの時に甲状腺機能亢進症状なく，ＴＲＨ負荷でＴＳＨ 1.0μU/mℓ→2.7μU／mℓ（30分），0.9μU/mℓ（120分），プロラクチン 27.4ng／mℓ→32.2ng/mℓ（60分），17.4ng/mℓ（120分）とＴＳＨの反応は抑制され，プロラクチンの反応は正常であった。

全ての治療を中止10日目のＴＳＨ 184μU/mℓ，T_4 2.1μg/dℓ，free T_4 0.36ng/dℓ，T_3 68ng/dℓ，free T_3 1.8pg/mℓで，活動の低下をみとめ甲状腺機能低下症の所見であった。

以後，ℓ－T_4 50μg／日で治療中で無症状である。

本症例は，クレチン症であるが外因性のℓ－T_4に対してはＴＳＨが正常値にならず，T_3投与によって血清T_3異常高値になっても甲状腺機能亢進症状を示さない。視床下部・下垂体系の外因性甲状腺ホルモンに対するＴＳＨ反応域値の高値，末梢組織の甲状腺ホルモンに対する不応症などが考えられる。長期間の観察，リンパ球，線維芽細胞の T_3 レセプターの検査などが必要と考えられる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

本症例は,クレチン症であるが外因性の1一T4に対してはTSHが正常値にならず,T3投与によって血清T3異常高値になっても甲状腺機能亢進症状を示さない。視床下部・下垂体系の外因性甲状腺ホルモンに対するTSH反応域値の高値,末梢組織の甲状腺ホルモンに対する不応症などが考えられる。長期間の観察,リンパ球,線維芽細胞のT3レセプターの検査などが必要と考えられる。